

## 唐獅子

この数年、秋になると、大学のオープンキャンパスが花盛りである。各大学が学生獲得のために、「まずは自分の大学の良さを知ってほしい」というわけなのだ。私も随分このオープンキャンパスでの講義・講演を依頼され、いくつかの大学を訪れている。すると、毎年のように新しい校舎、新しい設備が増えてゆく大学が多く、昔ながらの「趣」といったものが姿を消していつてしまうのが少々寂しい気がする。

そんな私も、30年ほど前、琉球大学が西原に移転した年に入学をしたため、あのレトロだった首里のキャンパスでは学んでいないのだ。しかし、男子寮が今の県立芸術大学の建つ場所にあつたため、寮生だった私はかつてのキャンパスと、その「大学のある街」の風情を見ることができたのだ。だが、初めて首里の琉球大学を見た時には、「今までの先輩方はなんて古くさい校舎で勉強していたのだろう。新しいキャンパスになって良かった」と思ったものだった。

しかし、こうして時がたつて振り返ってみると、歴史を刻んだ建物の持つぬくもり、周りの木々のざわめ

鳥光 宏

## 懐古の心と古典文学

きや鳥・虫の声々が思い出される。「あのころをもっと大切に生き、そして、あんなこともしていたら…今はもっと輝いていたはずだ」。きつとこうした後悔にも似た念を抱くのは私だけではないのだろう。

最近、レトロを懐かしむ街並み散策が、台湾やバンコクでもブームとなっていると聞く。きつと国を分かつことなく、人は昔を懐かしみ、昔のシンプルな生き方に憧れを抱くのである。もしかしたら、何でも効率化優先となつてしまつた現代社会での心の歪み<sup>ゆがみ</sup>が、昔への回帰を促しているのかもしれない。そうしてみると、私の研究・講義をする「古典文学」というものの中には、たぐさんのシンプルな考え、人間の持つ直感力というものが書かれていて、「これこそ日本の宝物であると言えるのかもしれない」と最近はずいぶん思うことがあるのだ。

さて、11月5日には昭和薬科大学付属高校の特別講座で講義をさせていただくことになっている。単なる受験勉強としてだけでなく、シンプルな生活の中で書かれた「人のぬくもり」にも触れられる講義ができればと思っている。(講師・作家)